

昭和56年度大学院卒業論文（気象学関係）

及び気象大学校卒業論文一覧

大学間のみならず気象学会全体に相互の関心を深めることを目的とした表記の一覧掲載は、昭和51年度を最後に中断しておりました。

しかし、当初の目的は今日において依然として意義をもつことや、会員各層から復活の要望もあり、昭和56年度分から再掲載することになりました。

なお、調査不十分の為、掲載もれがありましたら御面倒でも御通知いただきたいと思ます。

（「天気」編集委員会 担当：下道正則）

1. 大学院卒業論文

いずれも理学系研究科、氏名（大学、専攻名）、論文題目、発表雑誌名の順、*印はいわゆる論文博士で昭和56年度中に審査が行われ学位が授与された者であるが参考のため併記した。

昭和56年度 博士論文

山田知充*(北大論文博士)

Studies on Accumulation-Ablation Processes and Distribution of Snow in Mountain Regions, Hokkaido Contributions from the Institute of Low Temperature Science, Hokkaido University (in Press)

高野精秀（東北大地球物理）

地球系粒子による光の散乱に関する理論的研究
内山明博（東北大地球物理）

上層大気中における赤外放射伝達に関する研究
野元世紀（筑波大地球科学）

Local Anticyclone and Cyclones in Japan
黒坂裕之（筑波大地球科学）

Synoptic Climatological Study on the Conditions for Formation of the Cloud Bands around Japan in Winter as Revealed by Satellite Photographs

吉崎正憲*(東大論文博士)

準地衡風2層チャンネル流の中の有限振幅傾圧波の安定性

J.M.S.J., 60

里村雄彦（東大地球物理）

浅水シアー不安定に関する研究

J.M.S.J., 59, 60

吉川友章*(東京理科大論文博士)

光化学大気汚染・数値シミュレーションのモデル開発に関する研究

藤吉康志（名大大気水圏）

中層降水雲のレーダーエコーの構造と降水形成過程の研究

J.M.S.J.

安成哲三*(京大論文博士)

Study of the Active-break Cycle of the Summer Monsoon over India around 40-day Period

J.M.S.J.

勝井辰宣*(京大論文博士)

A Dynamical Treatment of the Structure in the Lower Layer of Typhoon
Geophysical Magazine

昭和56年度 修士論文

遊馬芳雄（北大地球物理）

イオン捕捉による降水粒子帯電機構の研究
未発表

堀江成人（北大環境構造）

北海道オロフレ山系山岳性降雨の研究
未発表

石川重年（東北大地球物理）

気象衛星「ひまわり」の写真を用いた雲解析

岩田信英（筑波大環境科学）

エーロゾル組成が雲核スペクトルに与える影響

石田信浩（筑波大環境科学）

大都市圏における降水量変動の時間・空間的構造

山田真吾（東大地球物理）

相模湾沿岸域における海陸風の観測

- 未発表
- 増田耕一（東大地球物理）
北半球大気中の非断熱加熱
未発表
- 楠 昌司（東大地球物理）
地形が入った β 平面順圧チャンネルモデルの定常解
未発表
- 進藤武彦（東大地球物理）
金星大気四日循環の数値シミュレーション
未発表
- 安枝伸子（お茶の水大物理）
階段状地形の後流の構造（第1部：階段状地形の後流，第2部：後流渦中の拡散）
天気，Vol. 29, No. 6
- 西山芳明（都立大地理）
関東地方の大雨とその集中性について
未発表
- 梅本 享（都立大地理）
ニッ玉低気圧の総観気候学的研究
Geographical Reports of Tokyo Metropolitan Univ.
(in press)
- 小笠原正文（東京理科大物理）
Analysis of time variation of radon-222 and its daughters concentration in the lower atmosphere
- 林田佐智子（名大大気水圏）
成層圏エアロゾル濃度の変動とその成層圏オゾン濃度分布に対する影響
- 樋口克志（名大大気水圏）
巻層雲のミリ波レーダによる観測
- 山中大学（名大大気水圏）
中層大気の変動と乱流の研究—慣性内部重力波の鉛直伝播特性とその碎波—
- 赤枝健治（名大大気水圏）
雲の形成—蒸発過程における硫酸塩粒子生成に関する研究—特に粒径分布の変化に着目して—
- 内田 論（京大地球物理）
音波探査装置で観測した積雲の雲底下の性状について
未発表
- 秋山孝治（京大地球物理）
太陽黒点数と気候要素の相関解析
未発表
- 中原一成（九大物理）
赤道流の順圧不安定性について
- 未発表
2. 昭和56年度気象大学卒業論文
- 原 昌弘
低周波 エネルギー を保存する時間積分法と Arakawa B-Scheme への適用性について
J.M.S.J. Vol, 60, No. 2 近藤・斉藤・間宮・原の論文の一部として発表
- 岡田憲治
気象衛星資料などによる台風の転向点付近の研究
未発表
- 保谷信親
台風の立体構造の研究
未発表
- 佐々木洋
冬季の日本南海上における熱・水蒸気の収支と雲の生成
未発表
- 磯部英彦
1981. 3. 15「二次前線」に伴って発生した竜巻の解析
未発表
- 三浦郁夫
冬季の日本海における熱と水蒸気の収支について
未発表
- 青梨和正
鉛直シアのある場合の二重成層流体中の対流運動の線型安定性
未発表
- 田中省吾
台風域内の境界層
未発表
- 宮尾 孝
キレートろ紙—原子吸光による重金属分析法の確立と海水への適用
未発表
- 松森敏幸
発震機構の研究
未発表
- 小泉岳司
爆破地震動観測装置の改善
未発表
- 日当智明
(1160頁に続く)

この間渦パターンCは山陰地方に入って不明りょうとなったが、小規模の渦が次々と発生しかなりの雪を降らした。トランスバースモードの雲もくずれはじめ、日本海北西部は通常の筋状の雲に変化した。

1月29日には強い冬型気圧配置となって、山雪型の典型的な筋状の雲が支配し、渦パターンAは500 mbの正渦度・地上低気圧とともに津軽海峡東方に移動しつつある(写真6)。

以上に示したケースは、3つの渦パターンが共存した点がやや特異であるほかは典型的な寒気吹き出しの変化過程の例であり、実際にはこれに多少のvariationが加わる。この例から次の2点に注目したい。

第1に3つの渦パターンの違いである。渦パターンAは発生期は地上・上層の循環と対応しないが、寒気吹き

出しの中期以後には対応して発達する。Bは地上低気圧にともなうもので寒気吹き出しの先駆的性格をもつ。CはBが東進後寒気吹き出しの中期(里雪型期)までにみられるもので、地形なども密接に関係し大雪をもたらすため、多くの人が調査している。冬期日本海には他にもいろいろの渦パターンがみられるが、以上の3つは代表的なものである。

第2に注目したいのは、このような各種渦パターンやその他の雲システムには、発生時期や発達衰弱に一定の順序があり、かつ互いに関係しあっているため、それぞれの性格を知るには、おのおのを単独で調べるのではなく寒気吹き出しのライフサイクル全体の中でとらえ、正しく位置づける必要がある点である。このことは予報の現場においても、留意すべき事項である。

日本気象学会昭和58年春季大会の告示

1. 期 日

5月18日(水)～20日(金)

2. 会 場 研究交流センター

(茨城県新治郡桜村竹園 2-20-3)

Tel. 0298-51-1331

3. 研究発表

1) 講演申込・予稿原稿の締切 2月25日(金) 必着
期限厳守のこと

2) 申込先: 東京都代千田区大手町 1-3-4 気象庁
電子計算室内 講演企画委員会(多田一

正)

3) 様式: 本号挿入の申込用紙に記入, 予稿原稿を添えて申し込むこと。原稿用紙は本誌挿入のものを使用すること。詳細は次頁の講演予稿集原稿の書き方をご覧ください。

4) 講演時間: 討論を含め12分程度

講演時間は事情により短縮されることがあります。

シンポジウム 大気境界層について——タワーと風洞に関連して

(1158頁より続く)

表面波の分散と地下構造

未発表

松原竹男

北太平洋及び熱帯海域における中・深層水と化学成分との関係

未発表

中代 誠

天空散乱光の性質に関する研究

未発表

佐々木秀孝

マイクロコンピュータの製作と利用

未発表